

# 洋上風力発電 日本に最適



浮体式洋上ウインドファームの風車。後方は福島第一原発。7日午後、福島県沖で、本社へ「おおじい」から

## フクシマ 先進地に

### 来年4月実用化めざす

福島県楢葉町の沖合二十キロ、東京大や日立製作所など大手企業十社が共同で、複数の風車を浮かべた洋上風力発電の実験を続けている。来年四月の実用化を目指す。海に囲まれる日本にとって、陸地より強い風が吹く海上は風力発電の適地だ。

遠くに東京電力福島第一原発の建屋が見える海上、浮体の上で、高さ百メートルを超える三基の風車が羽根を回す。浮体は養殖いかだのように、鎖で海底に固定されている。

技術面で支える東大大学院

工学系研究科の石原孟教授（社会基盤学）によると、福島沖は風が強く吹き、風力発電に向いている。欧州で盛んな洋上風力発電は、遠浅の海底に風車の基礎を固定する「着床式」が一般的。しかし、日本の沿岸は水深が深いため「浮体式」の方が活用の幅が広いという。

事業費計五百八十五億円の試験は、原発事故を受け、経済産業省の委託で始まった。二〇一三―一六年、三菱重工

業や日立などが製作した風車三基を設置。出力は計一万四千瓩で、約一万世帯分の電力を賄える。

複数の浮体式風車による風力発電の実験開始は世界初だったが、実用化は英国に先を越された。実験では台風が風車に与える影響や、浮体を漁礁に活用する可能性などを探っている。

浮体式は世界でまだ普及していないため、研究でリードする日本が、世界標準の規格を主導できる可能性がある。石原教授は「実用化すれば国産風車の輸出に弾みがつく。福島から新たな産業を生み出せる」と話す。（池内琢）